

山と博物館

第35巻 第10号 1990年10月25日 大町山岳博物館

信州ゆかりの水彩画展 当館巡回 $\frac{10}{28} \sim \frac{1}{6}$



不破 章 信濃白馬村(大出) 1964(S 39)信濃美術館所蔵

第三回長野県博物館協議会巡回展
「信州ゆかりの水彩画展」に寄せて

石沢 清

信州は昔から水彩画が盛んで、現在でも水彩画家の多いことで知られている。

大下藤次郎、石井柏亭など、日本水彩画界の先人たちのかわりも深い。そして、信州からも、丸山晩露、小山周次、篠原新三など、第一級の水彩人も出ている。

信州の地形は変化にとんでいて、岳と山脈、山湖と清流、森林と草花……。この自然に、春、夏、秋、冬の色が織りなす自然美は、これら水彩画家たちの絶好のモチーフになってきたのである。

信州は、実によく画家たちの写生地になっているのである。このことは、今日でも同じことである。

今回の「信州ゆかりの水彩画展」に出品されている二十余名の画家たちは、日本の水彩画の歴史にのこる人々である。

これだけの画家の作品を、県下の博物館協議会の方々の手で実現したということは大変なこと、その苦労がしのばれるのである。

従来、美術館・博物館は、やや閉鎖的な面があり、自館で持っている作品は、固定的に展示していることが多かったと思う。

したがって、その作品は、そこまで足を運ばなければ鑑れないことが多かったのであるが、近年は、互いの館が協力し合うことにより、いろいろな企画展が実現していることは、とてもすばらしいことだと思っている。

館の歴史、規模により、所蔵作品量にも当然のことながら差はあるであろうと思うが、それを越えて実現していることも、よくわかるのである。

大町の場合は、いつも、一方的に助けていただいていた巡回させてもらっていると思うが、有難いことだと思っている。

(日展会友・大町山岳博物館嘱託員)

楨 有恒先生を憶う

(後)

丸山 彰

大町時代(二)

隠栖の百瀬さんと、戦災と追放の身の楨先生との交りは、毎日のように高瀬橋を渡って、約二年間続いた。僅かな配給の米では食べるに事欠く時代ではあったが、二人には温かく心の通った平安な日々であった。

このころ、次のような隠されたエピソードがある。

奥様の実兄にドイツ大使をされた大島浩という方がおり、当時戦犯として国際裁判に問われていた。奥様はじめご一家の心痛は並々ならぬものがあつた。そんな事もあって奥様には上京の機会がよくあつた。

ある冬の夜のこと、恒治さんを伴って東京

から帰る奥様を、先生は大糸線信濃常盤駅へ迎えに赴いた。昼間降雪があつたため、ザックには二人の履く長靴が入っていた。駅近くでたまたま巡回中の警官に、そのザックの中身が米と疑われ、見せるよう迫られたが、違法のものではないと強く拒んだため顔を殴られるという暴行を受けた。あとでこれを聞いた百瀬さんは大町警察署へ嚴重な抗議に及んだ。非を認めた警察では署長が仏崎のお宅にあり、陳謝したという。警察の横暴に怒りをこめて、興奮しながら百瀬さんが私に話してくれた秘話である。



文部省登山講習会(立山)で、右は筆者 S42.8

後日、奥様はその時の事をこう語られた。「スイスから持ち帰った赤いマフラーを首に巻き、ベレー帽をかぶって当時には珍らしい服装だったので闇屋に間違えられたのでしょう」と。

なお大島元大使は裁判の判決で重罪を免れたことを付け加える。

戦後、文部省は学校教育に男女共学を勧めていた。このことについて先生にご意見を伺ったことがあつたが、次のように答えられた。「スイスに滞在中、日本から友人が訪ねてくると、懐しさの余り近隣にいる友人を呼び合い、夜を徹して楽しむことがあつた。これを見て西洋人たちは『日本人は男だけ、あんな

な楽しく過ごすことのできるのが不思議だ』とよく言われた。男女が一緒に学ぶことは、好ましい自然の姿ではないでしょうか。」

学校へもお招きし講演もして頂いた。山に生きる尊い話は、生徒に深い感銘を与え、後日行われた全校集団登山の導きともなった。

昭和二年(一九四七)には恒治さんが、神奈川県湘南高校へ単身で転校。翌年、ご夫妻も茅ヶ崎へ引越された。大町を去られても、二年(一九四七)創立の日本山岳会信濃支部長を二年まで務められ、長野県山岳界に功績を残された。(日本山岳会々長は昭和十九年(一九四四)から二十一年までと昭和二十六年(一九五二)から三〇年の二回に亘り務められた。)

マナスル登頂とその後

昭和三年(一九五六)第三次マナスル登山隊長として指揮をとり、宿願の八千メートル峰の世界初登頂に成功した。蓄積された高い知識と技術、円熟した人柄は立派な指導力となり、見事なチームワークを生み成功に結実した。

この成功は日本人の山への関心を高め、功績が評価され、文化功労者の栄に輝いた。(四〇年(一九六五)には勲三等旭日中綬章も受彰) 四年(一九六七)文部省登山研修所の設立に尽力され運営委員を務められ、直接の指導にも当たられた。研修所は立山の麓・千寿ヶ原に設立された。最初、全国高校登山指導者講習会が開催され、各県から一名の代表が集められたが、筆者も県代表として直接のご指導を頂けた。数日間起居を共にし立山を登ったが、年齢を召されたとはいえ、険しい場所を歩かれる足取りは流石に確かで、名人芸を見る思いであった。



狩野さんのために揮毫される先生 S52.6.4

(中)筆者と(右)営林署上高地担当官・遠山鎮彰氏(今春急逝)

鹿島槍ヶ岳山麓・狩野さんの頌徳碑

昭和のはじめ、わが国の登山技術は向上し、なかでも尖鋭なクライマーたちは競って困難なルートから諸峰の初登を目指した。鹿島の北壁、奥壁もその一つで、麓の鹿島集落を根拠地にする者も増えた。此処の住人・狩野きく能さんは、この人たちのために親切を尽くした。五二年(一九七七)、亡くなった故人を偲び、縁者たちは頌徳碑の建立を計画、筆者を通じて楨先生に揮毫をお願いすることになった。きく能さんには一回の面識しかなかったが、大勢の登山者がお世話になったからとおひきうけくださり、ウェストン祭の折に書かれるとお約束を頂いた。

祭の前日、徳本峠を越えてこられ、休む間もなく、西糸屋の一室で面会を謝絶して一時間半にわたって筆をとられ見事な碑文ができあがった。この頌徳碑は鹿島集落鹿島山荘の裏に建てられている。

追悼

昨年、ご逝去の報に接し、悲しみのうちに上京、会葬させて頂いた。新宿千日谷会堂で日本山岳会葬として行われたが、偉業と優れた人柄を慕う人たちが堂はあふれ、しめやかに営まれた。読経を聞きながら悲しみは深く胸に沁み込んだ。



狩野さんの頌徳碑

慶応大学山岳部OBで組織する登高会(会長谷口現吉氏・日本山岳会名誉会員、マナスル第二次隊員、山岳博物館顧問、大町市在住)が『登高会々報・横さんの想い出特集』を発行した。谷口会長はじめ親しかった方々の追憶が記された中に、ご子息恒治さんの「父上との半生」の記があり、私など知ることもなかったより偉大な先生が的確に立派な文章で書かれていたので抄出して載せて頂く。

「あれは父が亡くなる五年位前のことだったと思う。或日私に「人間は死んだらどうなるのかな」と半ば自問する様にいったことがある。私が真意をはかりかねて黙っている。「九〇年生きてきたけれど本当に短かった。まるで一瞬に過ぎた様だよ」と続けていった。然し今思うと、この言葉は未知の死に対する怖れというよりも、むしろ父が生涯努めていた自己研鑽を通じて人間としてあるべき姿を真摯に生き、自ら満足出来る精神的境地に達した現在、肉体の亡び行く日が遠くないのを自覚して惜別の情を吐露したのではなかったかと思われる。……

随分前に私が登山の動機は何かとたづねた所、少し考えてから「多分行為の悦びだと思ふね」と答えたのを憶えている。……

物質的、人工的なものには殆ど興味を示さなかった。小説は虚構であるが故に読まなかった。歴史書は人間の欲望と葛藤の記録である故に手にとらなかつた。唯、哲学、考古学、

天文学、地質学等に就いては倦むことを知らず……私達家族に読んだ本の内容を解説していた。」

ある時、恒治さんが在学する高校山岳部から講演依頼をうけ学校に赴いたところ、公職追放者は敷地に立入ってはならないと申し渡された。「公職追放という措置は戦勝国と敗戦国の力関係の構図として捉えていた私には不可解の出来事だった。ましてや私がそれ迄在学していた長野県の大町中学校では全校で父を暖かく迎えて下さった丈に割切れない気持は後々迄残った。……日頃柔和な父の表情から、ほほえみは全く消えていた。生涯を通じて愚痴、泣言の類を一切いわない男であったが、この出来事についても以後何もいわなかったのが強い印象として残っている。」

また、屋久島の巨木伐採の現場を見て、「我身を切られるような気がする……何千年何百年かかって作られた自然の調和と景観を営利目的で平気で破壊するのは野蛮行為だ」とよく語っていた。

以上無断で書かせて頂いたが、山岳博物館と関わりが深く、先生と格別親しかった谷口さんと、昔の誼みの恒治さんに甘えて、お許しを頂きたい。

山を尊び、山を愛し、山とともに生きた先生は、マナスル登頂を終えて「征服したので

はなく、登ったのである。登山は楽しむものである」と語っておられる。

マナスルの山中で露営の際「寝袋から手を出して、テントの端をかがけて満天の星くずを眺める。ほほを打つのは露のうるおいか。夜の香りか。この美しさは露営の楽しさである」(『山の心』毎日新聞社刊)

至福の先生が見えるようである。

今、何処の山で峰々を望み、夜の星を眺めておられるだろうか。

岳聖・横先生に長い間頂いたご交誼を心から感謝申しあげ、ご冥福をお祈りして拙い筆を擱かせて頂く。

(日本山岳会々員、大町山岳博物館嘱託員)



チヤンタン紀行

(2) 西田 均

一日目はラサからシユガツエまでの三六〇km。未舗装の道路を日本では想像もつかない勢いで走り抜ける。

猛々たる砂ぼこりに車内も体も細かい砂でザラザラとなり、激しい振動にアシストグリップを握りっぱなしの一日となる。

チベットは遊牧民族というイメージが強いが、ギャンツェに近づくあたりから飾り立てたヤクを使い家族総出で畑を耕す風景が颯々と続き、農耕民族でもあることを実感する。

街の入口で土壁の建物に入り込んだ。なにが始まるのか興味深く見ていると、鉄格子の間からホースが伸びガソリンの補給が始まった。奥で計ったガソリンをホースの元の缶へ人手で注いでいるようだ。支払いはチベット

政府発行の燃料券。日本との違いをかいま見ることができた。

二日目、チヨモランマBCやネパールへの分岐点ラツエを過ぎるとたんに道は細くなった。河原の中や山腹に付けられた道を進む。幾つかの分水嶺を越え、点在する村もまばらになり始め、大地が大きく過ぎるためか風景も変わりえがしなくなり、視覚もおかしくなつて地平線と台地の端との区別もつかなくなってくる。数十kmおきにある道班と呼ばれる道路補修人の基地が自分達の位置を確認させてくれる。

南にチヨ・ユヤシヤバンマなどの八〇〇m峰が見えるとのことであったが、残念ながら今回は雲に覆われ見ることはできなかった。

四日目、単調な、かつ大き過ぎる台地の西進も終わり三八道班から北進を始める。いよいよトランスヒマラヤ越えが始まるのだ。

修行僧河口慧海やハインリヒ・ハーラーがインドから密入城しラサへ向かったときにこのあたりを通過している。

慧海、ハーラーさらにはヘーデンが苦悶した大地、本でしか知ることの出来なかった世界に自分自身がいるのだ。彼らは、この荒涼とした大地をどんな思いで通過したのか。往時の苦労の大きさを、彼らの偉大さを薄い空気の中で改めて認識したのである。

我々が北へ進む谷間には地図で見える限り道は無い。もつと西へ進んでからの道は記入されて

れているのだが…。

北上する道路沿いに湖沼が点在し始め、羌塘の塘が池塘＝湿原を意味することを改めて認識する。ソーダ質が多いためか湖はいずれもコバルトグリーンかエメラルドグリーンの水面を見せている。

遊牧民の姿も見え始めた。「自然に生きる」といった雰囲気全体から漂ってくる。

トランスヒマラヤを北上する道沿いには街も点在する。一番大きな街ツォチンには街のための自然環境が揃っているとは見受けられない。荒野に忽然と現われた街には病院やマーケットなどもあるが、街の雰囲気とは異質なパラボラアンテナが印象的であった。この街は車輛の中継点として、また行政的な手段として中国政府により造られたように思える。

未踏峰シャーカンチャンを望みしばらく進むとトランスヒマラヤも終りを告げる。

平原のかたに暗雲が渦巻く山並を遠望する。やつと目的地羌塘高原の最奥部が視界に入ったのだ。

今までのルートは既に幾つかの外国人隊が聖山カイラス方面へ向けて通過している。トントの街を過ぎ、外国人としてはヘーデン以来の羌塘無人地帯へと車を乗り入れた。これから先は地図に道も記入されていないルート。地図とランドサットの写真、衛星の電波で緯度経度を算出する機械で現在位置を確認して行かなければならないはずである…。

しかし、予想に反して轍が所々についている。「大掛かりな調査でも入ったのか」という懸念も出て来たが、最終的には、遊牧民との交渉と密猟者の通り道だと判明した。私達も車で移動するため線では羌塘高原



遊牧民の母子
羌塘無人区にて

チベット関係

★チベットには犬が多い。街の犬は比較的小となしいが、遊牧民の犬はよく吠え、時折唸り声を発して私達を襲った。殆どの犬は足が一本無いなど足が不自由だ。悪い事をして切られたのだと言う。

狼の出没する土地柄、狼や不審者の出現を飼い主に知らせることで用は足りるのだろう。しかし、用足しの時まで襲いに来るのには参ってしまった。小の時は石を片手に追い払ったが、もう一方の時は…。

(大町山の会・山岳博物館友の会々員)

山と博物館 第35巻 第10号
発行所 長野県大町市 TEL220-2111
印刷所 大町 山岳博物館
大町 山岳博物館
大町 山岳博物館
定価 年額 1,130円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 長野四二二二九九三